ヨーロッパの自然保護問題とそれに関連して

井手　實夫

ヘッセの生地カルフの国際ヘルマン・ヘッセ・コロキウムに講演を頼まれて、その前夜五月二十四日にフランケンタールにいる友人を訪ねたところ、その息子さんに「ウィーン近郊のドナウ河の水郷地帯が発電計画のために水没しようとしている。われわれ若い者たちでその地方の知事に抗議行動を起こしているから、あなたも抗議文を書いて欲しい。急を要する。」と頼まれた。事情を聞くと、ウィーンの西方五〇粁くらいのドナウ河とマルヒ川との合流地帯で動植物相が非常に豊富な所で、ライン河のバーゼルとマインツ間のそれ以上に豊富な所だが、そこに発電計画があって、それが実行されると水路が変更され、環境が全く変って、貴重な動植物相が壊滅の危機にあるというのである。一九六〇年のヴァルシャワでの国際自然保護連合総会に、全く偶然のことから日本国立公園協会の日本代表として派遣されてからは、私は独文学者というほかに自然保護運動家としてヨーロッパに知人が多い。この地のことはかねて、六、七年前に亡くなったインスブルックの元植物園長ヘルムート・ガムス博士からも聞いていた。ガムス博士は蘚苔類の研究では国際的に有名だった人で、オーストリアのみならずヨーロッパの植物界を代表する人であったが、その当時日本には二十も国立公園があるのに、オーストリアには一つもなかったことを嘆いて、機会あるごとに私と一緒にオーストリアの諸所を講演をして歩いたことがある。ようやく五、六年前になって初めてオーストリアにも国立公園ができたそうであるが、そんなにおくれた理由は、国立公園の設立に経済界の反対が強かったからだと聞いている。従って、すでに建設の決定直前に私が抗議文を書いてもそれがさほどの意味を持つとは思われなかったが、その直後に会ったスイス自然保護協会事務局長ブルクハルトの勧めもあって、抗議文を書いて友人の息子あてに送っておいた。それから約一ヵ月後に帰国した私宛に知事からの返事があった。種々の問題を考慮し、地元の自然保護団体とも協議のうえ決定したことで、ご諒承を乞う、という内容であった。こういう問題は行政内部で公表される前に、すでに充分根まわしをしておいて、大体見とおしがついた所で世間は知るので、それから自然保護団体等が騒ぎ出しても手おくれになることは、わが国でも同様である。

ただスイスの場合は、自然保護運動が大きな企画に対して強い修正を行った例が最近二つばかり報告されている。一つはニューシャテル湖の南岸を走る自動車道路の建設計画に対する反対運動である。これは本年一月のスイス自然保護協会誌に報告されているもので、これはまだ結着を見ていないが、当初の計画に対して、平和で美しい故郷と自然を護ろうとする多くの修正が試みられている。

もう一つは七八年一月号に報ぜられているもので、ベルンの西北五〇粁ほどのビーラー湖岸を走る自動車道路及び鉄道計画に対する反対運動である。この計画に対して湖岸のリーガーツ村議会が村の平和と風景の保護のために立ち上がった。同時にベルン故郷保護協会、ビーラー湖保護協会が立ち、スイス故郷保護協会、スイス自然保護協会も加わった。幾度か当局と折衝の末トンネル案な

どの修正案も考えられたが、非常に多額な計費を要するため計画はたな上げの状態である。これらの計画の背後には当然巨大資本も暗躍しているのであろうが、それをこうした公開の論議で解決を求めて行くことができるのはやはりスイスという国の民主的な政治故であろう。オーストリアの場合はいくらか日本の政情と似かようものが感ぜられる。水力発電のかわりに火力発電などで解決されそうにもよそめには考えられるが、具体的な事情が何も分からないからなんともいえない。しかしごく最近までオーストリアには国立公園が一つも存在しなかったことを思うと事情は想像せられるようにも思える。

自然保護運動でこの頃しきりに範とせられるのが、イギリスのナショナル・トラストで、この運動がイギリスの三人の市民によって推進せられたといわれている。しかし、イギリスのナショナル・トラスト運動を始めた三人のうち二人まではサーの称号を持つ高官であった。さらにこれら三人の背後には当時のルイーズ王女の肝入りがあった。そして産業革命によるイギリス貴族の斜陽化に対して、イギリス建築美術の最高を極めた貴族の邸宅や庭園の維持管理をはかったのである。議会がこれに最大限の援助を惜しまなかったのも当然である。ナショナル・トラストの財産管理は議会によって承認され、さまざまな特権を附与されたのである。こうした背景に全くふれないで、ただ声を大にしてイギリスのナショナル・トラストの成功を真似ようとしても思うように成功するはずはない。日本の自然保護運動を支えているものは良識と先見の明を持った有識者を先頭とする目覚めた一般民衆である。一番欠けているものは権力と財力とである。しかも日本の自然保護運動はその権力と財力とに向って戦って来たのである。日本自然保護協会は、その幾多の試練をくぐって自然保護思想の普及に努力をして来たが、時として権力と財力とに対して幾分でも融和策をとろうとすると、それに飽き足りない人達が日本自然保護連合を作ることになる。北海道自然保護協会が大雪縦貫道路に対して、なんらかの解決策を見出そうとして努力していると、その態度に飽き足りない若いエネルギーが大雪を守る会を設立し、これが今日の北海道自然保護団体連合となるのである。しかし正直なところ、こうした若い人達の動きというものは、例えば委員会で多数を占めるとか、なんらかの形である力と結びつかないと、思うような効果を上げることはできない。既存の団体が若い人達から見ると、時に体制的に傾いたり、時に最後の一歩を踏み切れないで妥協したりするのは実に歯がゆく、口惜しく思えようとも、現実には体制的な力というものは大体六〇%くらいはあるので、実際問題としてそれをつき破ることはできないのである。

例えばある工事を阻止しようとして実際に実力行使をしても、行政が一旦決定して実行にうつった場合にこれを阻止することは不可能である。主観的には、筋を通して玉砕したのだから、自分としてなすべきことをなし通したという満足が残っても、それによって多くの保守的な支持者には行きすぎと見えて、その支持を失うことになる。やはりあるていどの妥協はしても、その活動母体の存在を維持することによって、その後の対策もたてられるし、その後の活動もでき、また好機がくれば過去の過失を指摘して、反省を迫ることもできる。どんなに理想的であっても、一時の少数の力で全体を圧服することができないことは、例えばクロンウェルなどの歴史を見ても明らかである。

しかしただ手をこまねいて、無念の思いで慢然と見ていようというのではない。その工事の経過の間、充分な監視を行い、いうべきことは充分に工事担当者及び監督官庁、さらには一般の人々に周知させ、将来起るべき被害に警告を発し、またその後に起こった被害等を充分に調査記録して、その工事の不当性を証すべきである。もちろん工事が完了すれば、あるていどのメリットは生ずるに相違ない。そのメリットとデメリットとを充分に比較検討して、それがいかに無駄な不条理なものであったかを実証すべきである。南アルプス・スーパー林道も激しい反対にもかかわらず敢行されたが、その結果として生じた被害、その修復状況等の比較検討が、ある時期に充分一般に周知されねばならない。その点こちらが不注意なのか、時期まだ尚早なのか、まとまった報告が出されていないように思う。

ところで、ちょうどヘッセ・コロキウムの終った直後、五月三十一日から六月二日まで、シュツッツガルトで、ドイツ自然保護公園協会の年次総会があって、それに出席するよう招待を受けた。一九六〇年に私はその総会で頼まれて日本の国立公園について三十分ほど講演をして以来のことであった。その会議は五月三十一日、と六月一日の午前中で終り、六月一日の午后と二日はシュツッツガルトに近い二つの自然保護公園の視察であった。三十一日の会議はむしろ委員会であったし、ほかに用事があって出席できなかったが、一日の午前の一般討論会に

出席した。その席で問題になったことは一つはリューネブルガーハイデのバッホレンダー(杜松)とハイデ(ヒース)との競合の問題である。以前にこの公園の歩道の両側に白樺が植えてあって、ハイデの中に一種の風景を作っていたのであるが、その芽がしだいにハイデの中に拡がるので、ついにすっかり切りたおされてしまった。いままたこの公園の最も重要な特色の一つであったバッホレンダーまでがハイデとの競合の問題になって来たことは、ハイデを維持しようとする人間の努力に対する皮肉ともいえる。自然は絶えずうつり変って行くもので、その中の人間に好ましいもの、特色あるものを維持しようとすることが、どんなに困難であるかを示すものである。阿寒国立公園の硫黄山の麓で白樺とイソツツジの競合が問題になったことがあるが、ハイデは二万ヘクタールの広さであるから、非常に困難な問題である。

その二は、当日の参加者は大体老人、あるいは中年以上の人で、若い人をほとんど見かけなかったことで、今後青年の参加を積極的に求めようということであった。その一つの方法として、ワンダーフォーゲルに働きかけようということがあった。ドイツのワンダーフォーゲルは日本のそれが山岳部まがいの登山に終始しているのと違って、元来は野山を歩きまわるのだったが、それだけではなく行くさきざきの風俗習慣や動植物を調べるなど、次第に知的な運動になって来ていたのである。しかしこうした自然保護公園協会の内部の動きが、例えばドナウの水郷地帯の水没を防ごうとする青年達の運動とは結びつかないし、また最近抬頭して来た緑の党ともほとんど無縁であることも当然といえば当然であるが、注意すべきことであろう。

六月二日は午后一時半、会場からバス二台を連ねて一行百人余りで、テュービンゲンに近い自然公園シェーンブーフを訪ねた。森林の入口から少し入った所でバスをとめて、森林監督官から枯れかけているフィヒテについて説明があった。酸性雨による被害でヨーロッパの森林が大きな被害を受けていることは聞いていたし、帰国後のNHKのテレビでも酸性雨の被害状況をうつしたそうである。残念ながらそれを私は見ることができなかったが、監督官の説明のとき酸性雨による被害かと聞いたとき、彼は酸性雨よりもむしろ空気汚染による被害だ、と答えていたことは注意を要する。その道は普段はバスや車の余り通らない道であるが、亜硫酸ガス、一酸化窒素、一酸化炭素、二酸化炭素(炭酸ガス)等の複合汚染は空気の移動に伴って、高速道路などから非常に離れていても被害を受けるのである。酸性雨はむしろこの空気汚染の副次的現象であって、元凶はなんといっても空気汚染である。西ドイツの州によっては高速道路の速度制限をしようという動きも出ている。とにかくこのままでは三十年後にはドイツのみならず、ヨーロッパの森林が壊滅的な打撃を受けるであろう、と心配されているのである。

今年五月五日、スイスの首都ベルンに三万人以上の自然保護、環境保護を訴える人々が集まって森林の枯死をふせぐための処置を求める運動が行われた。元営林局長エルンスト・クレープスは森林が枯死した場合、なだれの激増、土地の荒廃、動植物の枯死など生物が受ける損害はもとより、生物が生きられる環境が全く失われる怖るべき危険を説いて、これを救う唯一の道は空気の汚染を一九六〇年より前の状況に引きもどす以外に方法がないことを訴えている。そしてその具体策として、次の五つを早速実行すべきことを政府、議会、財界、すべての人々に要請している。

一、あらゆる汚染物質の発生の徹底的な減少。
二、発生源を取締る條項の徹底的施行。
三、資源、自然の生活財、エネルギー等の浪費制限。
四、益々増大する自動車交通の充分な抑制。
五、公共交通機関の有効な促進。

彼はこのような森林枯死の危機を招いたのはじつに、われわれ全体の責任である。そしてこのことを政府、議会、経済界全体に自覚させ、速急の処置をとるように民衆全体が圧力を加えねばならない、と説いている。

日本は四方海に囲まれていて、始終風が吹きぬけるせいか、ヨーロッパのような森林枯死の現実を知らないでいる。しかし、現在熱帯、亜熱帯の森林が毎日、四国の全面積に匹敵するほど減少している事実と共に、やがてはわれわれ自体の生存の問題に発展することを自覚しなくてはならない。ガソリンの不足のとき、人々は自家用車の自粛をした。今はガソリンよりも、森林の枯死は酸素の不足を将来するのである。モータリゼイションの厳重な規制と共に、排ガスをゼロにする研究がなされねばならない。

エルンスト・クレープスは、一九六〇年代以前の状態に空気の汚染状態をもどすことを要求している。しかし一九六〇年にハンブルクの植物園を訪ねたときに、当時の園長は特殊の苔が雨水では枯れるので、井戸水を掘って、特別に浄化した水で培養しているといっていた。雨

水の汚染について市当局はどうしているのか、またその問題を市当局はどう思っているのか、と聞いたが、なんらの処置もされていなかったことを覚えている。それが今日森林の危機が叫ばれるに及んで、初めて人々は運動を起こし始めたのである。

同じく一九六〇年に、ボーデン湖畔のスイス側で水泳プールを作った話を聞いた。ボーデン湖の水が汚染して不衛生だからという理由であった。私は当時のボンの営林局長に、なぜ関係各国でこの問題を討議しないのかと聞いたことがある。シュツッツガルトの水道は、ボーデン湖の深部からひいているのである。営林局長は国際協力ということになるとなかなか問題が難しい、とおっうげに語っていた。ライン河の汚染はようやく各国で改善をはかり出しているようで、またあるていどの成果も上って来たようである。しかし危険が目前に迫らない限りは社会の対応というものはこれほどおそいのである。

ヨーロッパの森林の枯死は当然現在以上にモータリゼイションの規制を強めるであろう。そしてわれわれがこれを対岸の火事と見ているうちに、わが国の重要な産業の自動車工業にさらに追うちをかけてくるであろう。

それは単に自動車工業に火がつくのみならず、じつはわれわれ自身の森林へも火がつく危険があることを銘記せねばならない。それはじつにわれわれ日本人のみならず、人類全体の運命の問題なのである。しかし人類全体の運命などというと、何か遠くのことのように思えるが、じつは焦眉の、われわれ自身の問題であって、われわれ自身がそのために第一歩を踏み出さなくてはなんら解決に結びつかない。消費の問題にせよ、汚染の問題にせよ、どんなことでも身の周りのことからまず始めることが最も大事なことである。それが全国民に浸透して初めて本当の力になるのである。それは非常に困難なことに違いない。現実の被害が起らない限り、政府や経済界は動こうとしない。しかし少なくとも早くそのことに気づかせるための運動を拡げることが、われわれ自然保護者の任務であるといえよう。日本で自然保護運動が具体的に始まってから、(というのは、最初の北海道自然保護協会が設立されたのが一九五九年、日本自然保護協会が一九六〇年のはずであるから、以来かれこれ二十四、五年の歳月を経て)じつに徐々にではあるが、それは心ずしも自然保護運動の功績だけではなく、石油ショック、あるいは様々な深刻な公害によってようやく人々の間に自然保護の重要性というものが、(それは今日ではむしろ環境問題という方がより適切でもあるが、)その当初とは比較にならぬほどに一般に浸透して来たのである。そのことこそこの運動を進めるものにとって、そしてまた人類の明日を憂うるものにとって最も大事な、そして頼むべき足がかりということができる。

(北海道自然保護団体連合代表)